

安徽屯溪土墩墓出土の青銅尊と原始青磁尊について

田畑 潤 (学芸員)

1. はじめに

中国における施釉されたやきものについて、初期のものは一種の灰釉陶器ともいえるが、胎土や焼成温度等の条件が後の磁器の条件を満たしたやきものであることから、中国で「原始瓷(磁)器」と呼ばれる。また、含有する鉄分が還元焰焼成により緑がかった青色に発色するものもみられることから青磁の源流と捉えられ、「原始青瓷(磁)」とも呼ばれている。なお、日本や朝鮮の灰釉陶器は、窯内でやきものに自然に降りかかった灰が器表面でガラス化することによる自然釉から、意図的に器表面に施釉するように段階的に発展したと考えられているが、中国の場合、前段階としての自然釉と考えられるやきものは確認されておらず、出現段階である殷代当初から意図的な施釉陶器として生産されたと考えられている。

愛知県陶磁美術館所蔵の原始青磁印文尊は、口縁が外に大きく広がるラッパ口、直線的長く立ち上がる頸部、丸く張り出した胴部、圈足を持つ。高さ 22.1cm、口径 20.0cm、胴径 17.3cm、底径 16.3cm で、胴部及び頸下部と圈足上部には渦状雷文がスタンプで施文され、区画の弦文もみられる。釉薬は器表及び内面全体に施釉され、黄色がかった発色を呈している(図 1)。中国長江中・下流域の春秋時代後期から戦国時代前期の青銅尊を祖形にしていると考えられる。

本論では、安徽省屯溪遺跡の土墩墓出土資料を中心に、春秋時代後期から戦国時代前期の原始青磁^(註1)と青銅器の関係性を考察していく。

2. 屯溪遺跡土墩墓群

屯溪遺跡は安徽省南部の新安江の上流に位置し、皖南丘陵地区に属する。1959年に屯溪西部の弈棋村の南から2基の土墩墓が発見され、その後の調査で計8基の発掘調査が行われた。報告によると墓の年代は西周時代後期^(註2)、あるいは春秋時代後期から戦国時代前期^(註3)とされ、越国の文化を示す重要な考古資料として研究されている。以下、年代の古い墓から順に、墓の様相と副葬品について概観していく(表 1)。

① 三号墓

発掘前の外観から、東西 33m、南北 26m、高さ 3m の土墩墓であることが確認される。墓室(底)の状況について、境界が不明確であることから副葬品の出土範囲から、規模を南北 6m、東西 9m と推定している。被葬者の人骨や棺槨等の装具も検出されていないことから詳しい葬制は不明である。また、土墩墓の土盛部分の東西が、後漢時代の磚室墓によって攪乱をうけているが、墓室(底)には影響はみられない。副葬品は青銅器 54 点、原始青磁 89 点、印文硬陶 13 点、土器 16 点、玉石器 57 点がみられる。屯溪土墩墓群の中で最大規模かつ副葬品も最も豊富な墓である。

青銅器は礼器 35 点、工具 8 点、武器 3 点、車飾 8 点の 4 種がみられる。礼器の内訳は鼎 6 点(円鼎 4 点、方鼎 2 点)、簋 6 点(両耳 4 点、無耳 2 点)、卣 2 点、盤 5 点(円盤 3 点、方盤 2 点)、盒 2 点、鑑 2 点、盃 1 点、壺 1 点、匕 1 点、動物形尊 1 点、器蓋 2 点の他に、単柱器 2 点と跪座人 4 点である。鼎・簋・卣・盃・盤などの器種構成は西周時代の黄河流域に典型的なものであるが、その形式や文様などは在地的要素が大きく反映されている。

原始青磁の内訳は、鼎 1 点、豆 14 点、尊 13 点、盂 27 点、盃 3 点、壺 5 点、罐 9 点、甌 12 点、杯 1 点、瓶 1 点、円座 2 点と座上の小盂 14 点(8 点と 6 点の組み合わせ)、漏斗 1 点である。原始青磁尊の副葬配置は墓室西部にまとめられているが、青銅礼器は方鼎 1 点が墓室西部から出土しているのを除き、墓室北東部にまとまっており、明確に分けられていることがわかる(図 2)。また、土墩墓の封頂部から原始磁器尊(M3:01) 1 点が検出されている。原始青磁の中でも豆と盂は墓室内北東部の礼器群とのまとまりの他、墓室北西部、西部、南部と各場所に配置され、罐は北西部、西部、南部、甌と盃は北西部と西部に分かれるのとは対照的である。

印文硬陶の内訳は、鼎 2 点、罐 10 点、瓮 1 点である。土器の内訳は、紡錘車 14 点と器蓋 2 点の他は鬻、罐、盤の

陶片が少量みられる。

②一号墓

土墩墓の直径は33.1m、南北8.8m、東西4.4mの墓室（底）規模を有し、墓底には鶯卵石が敷き詰められ一層の厚さは25cmを呈する。被葬者の人骨や棺槨等の装具も検出されていないことから詳しい葬制は不明である。副葬品は、墓底の鶯卵石上に青銅器18点、原始青磁68点、土器1点、玉石器4点みられる。

青銅器は円鼎4点、両耳簋2点、尊2点、卣2点、円盤2点、盃1点、三足器残片1点の他、五柱器2点と鳥飾2点がみられる。原始青磁の内訳は、豆29点、皿10点、尊5点、盃6点、罍5点、罐10点、甗3点である。土器は鉢の陶片1点である。副葬配置については、発掘調査前に一部の器物が取り上げられていたため、完全な状態は不明である。墓室東部の出土状況から、青銅礼器と原始青磁の副葬配置は意図的に分けられていたことがわかる（図3・4）。

③五号墓

土墩墓の直径は約15m、南北8.8m、東西6.6mの墓室（底）規模を有し、墓底には鶯卵石が敷き詰められ一層の厚さは25cmを呈する。墓底には2本の溝がみられ、排水溝と考えられている。被葬者の人骨や棺槨等の装具も検出されていないことから詳しい葬制は不明である。また、土墩墓の封土中から漢墓が検出されている。副葬品は、墓底の鶯卵石上に青銅器7点、原始青磁55点、印文硬陶7点、土器7点みられる。

青銅器は礼器の尊1点と盃1点の他、刀子4点と斧1点である。原始青磁は豆45点、碗1点、尊1点、獸耳尊1点、盃1点、罐4点、杯形器1点である。青銅尊が墓室南中央部に置かれているのに対し、原始青磁尊は墓室中央北寄りに1点と墓室南部端に獸耳尊1点が置かれている。印文硬陶は罐7点で、土器は鼎2点、鬲2点、盃1点、罐1点、盤1点である。

④四号墓

土墩墓が半分破壊されており、南北長6.7m、東西最大幅3.7mの半円形の墓室が確認されている。墓底の西側には鶯卵石が幅50cmで敷き詰められ、東側は鶯卵石が1列に並べられている。被葬者の人骨や棺槨等の装具も検出されていないことから詳しい葬制は不明である。また、土墩墓の封土が明代の住居址によって切られている。副葬品は、墓底の鶯卵石列の間から青銅器13点、原始青磁55点、土器（叩き具）1点、砥石1点が検出されている。

青銅器は礼器の尊1点の他、劍1点、戈1点、矛1点、鏃7点と刀子1点、斧1点である。青銅尊は墓室西南部の原始青磁豆の東縁から当地の農民によって検出されたとの報告がある。原始青磁は豆49点、碗4点、尊1点、罐1点である。青銅尊が墓室南中央部に置かれているのに対し、原始青磁尊は墓室中央北寄りに1点と墓室南部端に1点が置かれている。

⑤六号墓

封土及び墓室が破壊されており、残長2.85m、残幅2.8mの墓底が確認されている。墓底には鶯卵石が敷かれているが、排水溝等はみられない。ただし墓底の中央には腰坑が設けられており、鶯卵石が敷かれた二層台が構築されている。被葬者の人骨や棺槨等の装具も検出されていない。副葬品は墓底中央の腰坑付近から、青銅器1点、原始青磁18点が検出されている。

青銅器は礼器の尊1点が腰坑の北東部にみられ、他の原始青磁とはやや離れた出土状況である。原始青磁は豆8点、鉢4点、碗3点、盃2点、盤1点である。

⑥七号墓

封土及び墓室が破壊されており、残長6m、残幅3mの墓底が確認されている。墓底の東西には鶯卵石が敷かれた痕跡がみられる。被葬者の人骨や棺槨等の装具も検出されていない。副葬品は墓底北東部から青銅武器が、東南部から原始青磁と印文硬陶が検出されている。原始青磁は豆7点と罐1点で、印文硬陶は尊1点が確認されている。

⑦八号墓

土塚墓の封土の直径は約19m、高さ4mで、南北7.4m、東西10.3mの墓室（底）規模を有し、墓底には鶯卵石が敷き詰められ一層の厚さは25cmを呈する。墓底の四隅付近には明らかに大きな石が配置されており、墓底四辺の境界石と考えられている。被葬者の人骨や棺槨等の装具も検出されていないことから詳しい葬制は不明である。

盗掘の痕跡がないにもかかわらず、土塚墓の規模に対し副葬品は青銅武器1点、原始青磁15点、印文硬陶1点、石范1点、砥石2点と少ない状況である。原始青磁は皿1点、鉢1点、碗9点、獸耳尊2点、盃1点、罐1点であり、印文硬陶は尊1点が墓底中央部から検出されている。

⑧二号墓

墓は大きく破壊され、封土の詳細は不明である。墓底は残長5.2m、残幅2.2mで、厚さ25cmの鶯卵石の層が確認されるが、人骨や葬具等は見られない。残された副葬品は墓底東部から検出され、青銅器3点、原始青磁3点、印文硬陶1点、土器4点、砥石2点がみられる。

青銅器は礼器の尊1点、盤1点^(註4)、十字形飾1点である。原始青磁は鉢3点、印文硬陶は罐1点、土器は盃2点と紡錘車2点である。

3. 屯溪土塚墓出土の青銅尊と原始青磁尊、印文硬陶尊

屯溪出土の青銅尊は7点確認され、Ⅰ～Ⅲ型式に分かれる（図4）。Ⅰ式青銅尊は、西周時代前期黄河流域に典型的な觚形尊で、広いラップ口の口縁に、やや長い頸部が付き、丸底でやや縦長の胴部を持ち、外底に広がる高い圈足を有する。Ⅰ式青銅尊（M1：90）は、高さ29.7cm、口径24cm、胴径14.6cm、圈足径16.4cmで、胴部には顔面饕餮文が施され、底部には「□（＝向かい合う刀子形の文字に挟まれた「子」）字父乙」銘がみられる。Ⅱ式青銅尊は、広いラップ口の口縁に、やや長い頸部が付き、平底で横に丸く張り出した胴部を持ち、外底に広がる高い圈足を有する。屯溪出土の青銅尊7点中5点がⅡ式青銅尊であり、当地における典型的な型式、紋様として捉えられている。Ⅱ式青銅尊（M1：89）は、高さ18.4cm、口径17cm、胴径12.5cm、圈足径13cmで、胴部に多層構造の刺突文が施されている。同型・同紋様のⅡ式青銅尊（M5：50）は、高さ17cm、口径16.2cm、胴径12.2cm、圈足径12.5cmである。Ⅱ式青銅尊（M4：01）は、高さ16.5cm、口径16cm、胴径12.9cm、圈足径12.9cmで、頸下部と圈足上部には鋸歯文と交連文が、丸く張り出した胴部には多層構造の刺突文が施されている。また、胴部の刺突文中から雲文状のトルコ石象嵌の痕跡が4ヶ所確認されている。Ⅱ式青銅尊（M6：1）は底部が欠損しており、残高11cm、口径11.3cm、胴径8.9cm、圈足残高3cmで、丸く張り出した胴部に円圈文が満たされ、胴両側には小鼻紐（突起）が付いている。8基の土塚墓群の周辺で採集されたⅡ式青銅尊（採集2）は、高さ21.3cm、口径18.6cm、胴径14.3cm、圈足径14.4cmで、Ⅱ式青銅尊（M4：01）と同型・同紋様で胴部にトルコ石象嵌の痕跡がみられる。Ⅲ式青銅尊は、大きく開いたラップ口の口縁、やや太く短い頸部、張り出した肩を持つ平底の胴部、直線的に外底に広がる圈足を持つ。Ⅲ式青銅尊（M2：86）は、高さ19cm、口径19cm、胴径15.5cm、圈足径14.5cmで、肩と胴部に蛙文、交連文と刺突文が、頸下部と圈足上部に交連文と鋸歯文が施されている。

原始青磁尊は報告によるとⅠ～Ⅵ型式に分かれる（図5）。Ⅰ式尊は広い口縁に短い頸部、“く”の字に折れ曲がった胴部を持ち圈足が無いものである。Ⅰ式尊（M3：109）は、高さ13.5cm、口径18cm、胴径23cm、底径10.5cmである。Ⅱ式尊は盤口で、“く”の字に折れ曲がった胴部を持ち、圈足が付く型式で、口径が胴径より大きい。Ⅱ式尊（M3：40）は、高さ9.8cm、口径11.3cm、胴径11cm、圈足径5.8cmである。Ⅲ式尊はⅡ式尊をつぶした形状で器高は低く、幅が広い型式で、口径よりも胴径が大きい。Ⅲ式尊（M3：021）は、高さ11.1cm、口径15.6cm、胴径17.1cm、圈足径8.7cmである。Ⅳ式尊は盤口で、下膨れの胴部を呈し、やや直線的な圈足が付く。Ⅳ式尊（M3：42）は、高さ9.6cm、口径11.3cm、胴径10.6cm、圈足径7.2cmである。Ⅴ式は倣青銅尊で、広い口縁に胴部から直線的に立ち上がってやや外に折れ曲がる頸部を持ち、“く”の字に折れ曲がった胴部を呈し、やや高く外に広がる圈足を有する形状である。Ⅴ式尊（M1：58）は、高さ17.3cm、口径16.3cm、胴径13.4cm、圈足径10.8cmである。Ⅵ式尊は大きく広がる口縁、“く”の字に折れ曲がった浅い胴部、やや外に広がる高い圈足を持ち、口径が胴径よりも大きい。Ⅵ式尊（M5：59）は、高さ8.7cm、口径10cm、胴径9cm、圈足径8cmである。原始青磁尊のうち、青銅尊との類似性をみせるのは、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ式であるが、厳密に比較すると、Ⅴ式を除き、西周時代黄河流域に典型的なものとの在地的要素を持つもの両者とも異なる型式である。このことは原始青磁の他器種にも言えることで、屯溪出土の原始青磁鼎・豆・盃などは青銅礼器

とは異なる型式である。

また、胴部両側に獸耳が付いた尊もみられ、Ⅰ～Ⅲ式に分けられている(図6)。Ⅰ式獸耳尊は、広い口縁、湾曲した頸部、“く”の字に折れ曲がった深い胴部、短い圈足を有する。Ⅰ式獸耳尊(M5:48)は、高さ20.8cm、口径28cm、胴径32.5cm、圈足径20cmである。Ⅱ式獸耳尊は、外に広がる口縁、短い頸部、“く”の字に折れ曲がり下に窄まる深い胴部、やや外に張り出す底部からなる。Ⅱ式獸耳尊(M4:48)は、高さ17.6cm、口径20cm、胴径31cm、底径20.6cmである。Ⅲ式獸耳尊は、外に広がる口縁、やや立ち上がる頸部、“く”の字に折れ曲がり下に窄まる深い胴部を持ち、圈足は無い。Ⅲ式獸耳尊(M8:11)は、高さ26.4cm、口径20.5cm、胴径30.2cm、圈足径19cmである。こちらも青銅尊とは大きく異なる型式である。

印文硬陶については大口尊2点が確認されている。大きく外に広がる口縁、丸く膨らむ胴部で平底の型式であり、圈足は付かない(図7)。大口尊(M7:12)は、高さ17.9cm、口径18.5cm、胴径14.6cm、底径10.5cmである。大口尊(M8:15)は、高さ14.5cm、口径16cm、胴径13cm、底径8.8cmである。胴部の形状は上記の原始青磁尊、獸耳尊に比べ、青銅尊に近い。また、印文硬陶鼎は三脚部が外に向かって広がる型式であり、垂直形の中原のものとは異なっている。胴上部の形状に違いがみられるが越式の青銅円鼎を祖形としており、両者の密接な関係がうかがえる(図8)。印文硬陶の尊や鼎の状況から、青銅礼器の代替品として原始青磁ではなく印文硬陶を採用していた可能性が考えられる。

4. 屯溪土墩墓出土青銅器の性格と年代

屯溪出土のⅡ式青銅尊と同形のものは、安徽省寿県蔡侯墓、浙江省紹興城南坡塘郷獅子山M306、江蘇省邳州市九女墩三号墩等で検出されている^(註5)。

寿県蔡侯墓の被葬者は紀元前491年に亡くなった蔡昭侯申と考えられ、副葬された青銅器について春秋時代後期が下限年代とされる。墓の形態は中原と同様の長方形堅穴墓であり、鼎と簋を中心とした青銅器の器種組成も中原の様相と良く似ている。また一方で、鼎をはじめとした青銅器には南方楚文化の影響を受けたものや在地的要素の強いものがみられる。朱鳳瀚氏は中原の輝県琉璃閣甲墓と楚文化の河南省浙川下寺M2との比較を通じ、寿県蔡侯墓の性格について以下のように述べている。寿県蔡侯墓は、食器の組成は中原の形式を取り入れているが、鼎の型式は楚文化の影響を受けているものとしている。酒器の組成は、同時期中原や楚ではみられない青銅尊を中心とした独特のものであると捉え、水器の組成は楚の影響を反映している。これらのことから、蔡国の青銅器は中原との関係を持しつつ、楚国とも強く結びついた上で独自の特色ある器物を生み出しているとしている^(註6)(表2)。

浙江省紹興城南坡塘郷獅子山M306は紀元前648年に楚に滅ぼされた黄国との関連が指摘されている。黄国の青銅器は、春秋時代中期以降に出現する、中原とは異なる楚の影響を受けたものと捉えられている。江蘇省邳州市九女墩三号墩は封土を持つ土墩墓で、墓室は1棺1槨の主室に2人が埋葬され、その周囲に16人の殉葬者が確認される特殊な墓である。出土した青銅器の器型と紋様から春秋時代後期後半とされており、寿県蔡侯墓と同様に、中原の器種構成や器型を有しつつ、青銅尊を代表とする器物から南方独自の要素がみられる。これら中原と南方の要素を併せ持つ様相は屯溪土墩墓と共通しており、その年代も極めて近いものとして捉えられるであろう。

5. まとめ

屯溪土墩墓出土のⅠ式青銅尊は、西周時代前期の周原遺跡や晋国天馬一曲村遺跡など、黄河中流域の主要な西周文化圏でみられ、西周王朝の管理下で制作された青銅尊と考えられる。Ⅰ式青銅尊は当地において長く伝世されたのちに副葬されたものであり、Ⅱ・Ⅲ式青銅尊と共伴するものの、その制作年代については、Falkenhausen氏は屯溪土墩墓と青銅礼器について、採用している器型が黄河流域に起源を持ち、西周前・中期の青銅器もあることから、西周時代まで遡る過去の編年を誤りとしている。実際は、Ⅰ式青銅尊にみられる西周時代の器物が長期の使用を経たのちに埋納されたと捉え、共伴する青銅器及び土墩墓の年代について、春秋時代以降であると述べている^(註7)。また、寿県蔡侯墓で出土した青銅尊についても、屯溪土墩墓と同様に中原の觚形尊(屯溪出土Ⅰ式青銅尊)とⅡ式青銅尊が共伴しており、上記と同様の様相が想定される。西周時代の器物の長期的使用と嗜好は、西周後期以降廃れていく尊や卣などの酒器を模倣するという南方独自の文化とも関連するであろう。

当地において、尊という器種は青銅礼器の中でも特別な意味を持つ象徴的器物であったことがわかる。それゆえ、原始青磁の尊は青銅礼器と異なる型式が採用され、副葬配置にも明確な区別がなされており、青銅礼器と原始青磁は

制作・用途において異なる背景をもっていたと捉えられる。図1にみられる原始青磁尊は、祖形となるⅡ式青銅尊とは共伴関係にないことから、Ⅱ式青銅尊の制作年代より先の時代、戦国時代前期以降に、過去の青銅器を模倣するという背景の中で制作された可能性が考えられる。

[註]

1：中国の「原始瓷器」「原始青瓷」について、胎土、釉、焼成環境等いわゆる日本の灰釉陶器とは異なる条件、概念であり、本文では「原始青磁」という中国考古学で使用されている用語に統一する。

2：安徽省文化局文物工作隊 1959「安徽屯溪西周墓葬発掘報告」『考古学報』1959年第4期

3：李国梁 主編 2006『屯溪土墩墓発掘報告』安徽人民出版社

4：報告では器種を簋としているが、胴部は浅く盤の形状を呈している。

5：朱鳳瀚 2009「第十二章 春秋青銅器」『中国青銅器総論 下』上海古籍出版社

6：朱鳳瀚 2009「第十二章 春秋青銅器 蔡国青銅器」『中国青銅器総論 下』上海古籍出版社

7：Lothar Von Falkenhausen 著・吉本道雅訳 2006「第Ⅱ部 内的な連合と外に対する分界 第6章 拡大する社会」『周代中国の社会考古学』京都大学学術出版会

参考文献

日文

上田秀夫 2000「磁器の誕生－原始瓷器－」『磁器の誕生－原始瓷器－』山口県立萩美術館・浦上記念館

田畑潤 2006「西周時代における青銅器副葬配置についての検討－陝西省豊鎬・周原地域の事例を中心に－」『青山考古』第23号 青山考古学会

田畑潤 2008「西周時代前期における天馬－曲村墓地の被葬者集団について－青銅礼器副葬配置の分析から－」『中国考古学』第八号 日本中国考古学会

林巳奈夫 1984『殷周時代青銅器の研究－殷周青銅器総覧一』吉川弘文館

森達也 2002a「中国・青瓷ものがたり(7) 春秋時代の原始青瓷」『陶説』No. 587号

森達也 2002b「中国・青瓷ものがたり(8) 春秋時代の原始青瓷2」『陶説』No. 588号

森達也 2002c「中国・青瓷ものがたり(9) 戦国時代の原始青瓷」『陶説』No. 589号

森達也 2002d「中国・青瓷ものがたり(10) 戦国時代の原始青瓷2」『陶説』No. 590号

森達也 2002e「中国・青瓷ものがたり(11) 春秋・戦国時代の原始青瓷窯址」『陶説』No. 591号

弓場紀知 1999「中国の磁器の起源－いわゆる「原始磁器」の陶器史上の位置づけを中心に」『出光美術館研究紀要(5)』

Lothar Von Falkenhausen 著・吉本道雅訳 2006『周代中国の社会考古学』京都大学学術出版会

中文

安徽省文化局文物工作隊 1959「安徽屯溪西周墓葬発掘報告」『考古学報』1959年第4期

安徽省文物管理委员会、安徽省博物館 1956『寿县蔡侯墓出土遺物』科学出版社

河南省文物考古研究所、河南省丹水庫地区考古発掘隊、浙川県博物館 1991『浙川下寺春秋墓』文物出版社

孔令遠、陳永清 2002「江蘇省邳州市九女墩三号墩的発掘」『考古』2002年第5期

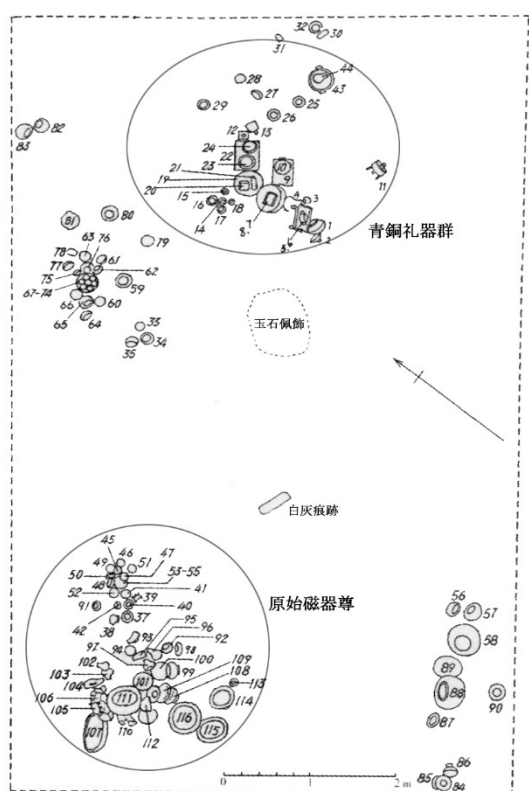
李国梁 主編 2006『屯溪土墩墓発掘報告』安徽人民出版社

浙江省文物管理委员会、浙江省文物考古所、紹興市文管会 1984「紹興306号戦国墓発掘簡報」『文物』1984年第1期

朱鳳瀚 2009『中国青銅器総論 下』上海古籍出版社

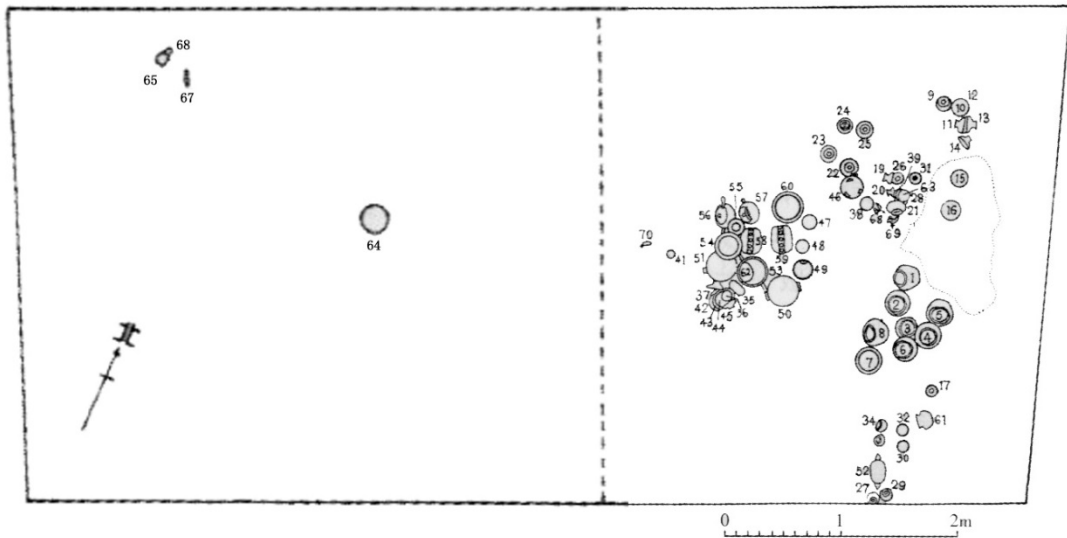


图 1：原始青磁印文尊



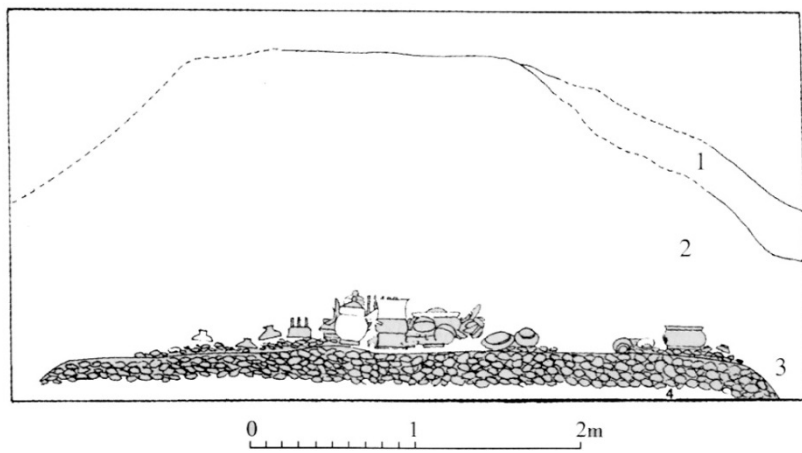
- 1 青銅簋 2·44：青銅器 3·24·32·54·88·91：印文硬陶罐 4：青銅壺 5·9：青銅方鼎 6：青銅盃 7·22·8·19：青銅盤 10·23：青銅盒 11·105：青銅卣鼎 12·13：青銅單柱器 14·15·17·18·25·26·28·29·33·45·51·85·87·108·113：原始磁器盂 16·52·60·62·66·75·77·84·86：原始磁器豆 20：青銅鑑 21：青銅動物形尊 30：砥石 31：青銅斧 35·59·65：原始磁器甗 37·38·40·42·92·98·99·109：原始磁器尊 39：印文硬陶鼎 43：青銅鏤空盤 46：原始磁器杯 47·49·56·64·78：原始磁器罐 50：原始磁器鼎 55·79：陶蓋 58：印文硬陶瓮 63·96·103：原始磁器盃 67·74：原始磁器卣座 93·97·102·104：原始磁器壺 94：原始磁器漏斗 95：原始磁器瓶 112：陶鬶

图 2：屯溪三号墓副葬品配置



1 - 8 : 原始磁器罐 9 - 32 : 原始磁器豆 33 - 37 · 62 · 63 : 原始磁器盂 38 - 45 : 原始磁器皿 46 - 49 : 青銅鼎 50 · 51 : 青銅盤 52 · 53 : 青銅簋 54 · 55 青銅尊 56 · 57 : 青銅卣 58 · 59 : 青銅五柱器 60 : 青銅盂 61 : 原始磁器尊 64 : 青銅三足器 65 : 陶鉢 66 : 砥石 67 : 白色石条 68 · 69 : 青銅鳥飾 70 : 玉飾

图 3 : 屯溪一号墓副葬配置



1 : 赤色封土
2 : 白色封土
3 : 鵝卵石
4 : 地山

图 4 : 屯溪一号墓立面图

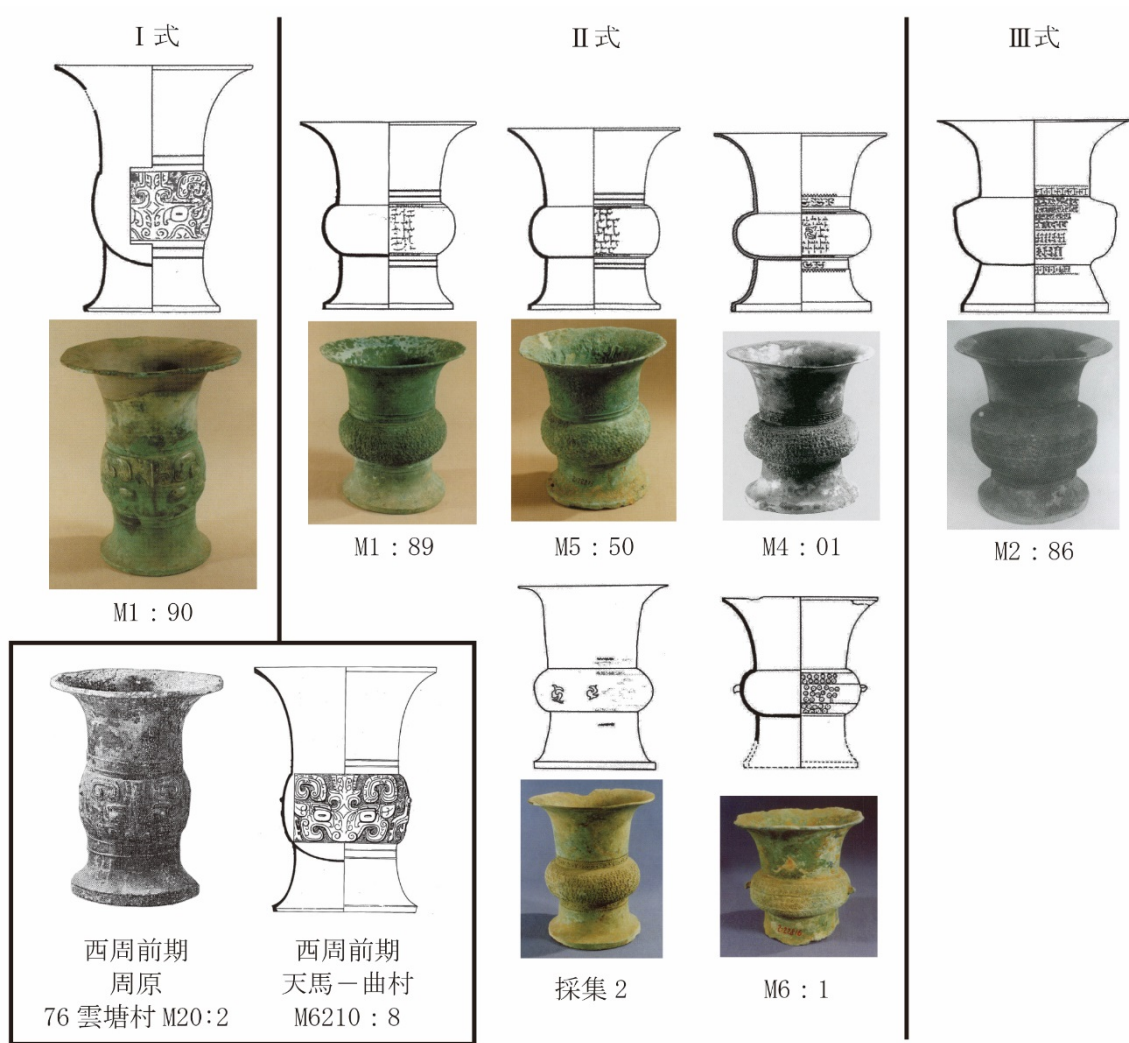


图 4：屯溪土墩墓出土青銅尊（□内は中原出土）

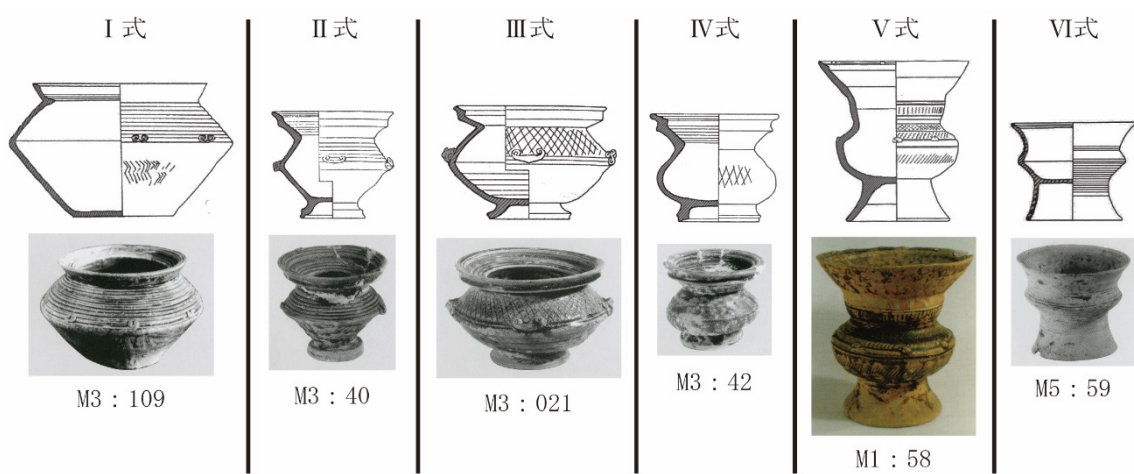


图 5：屯溪土墩墓出土原始青磁尊

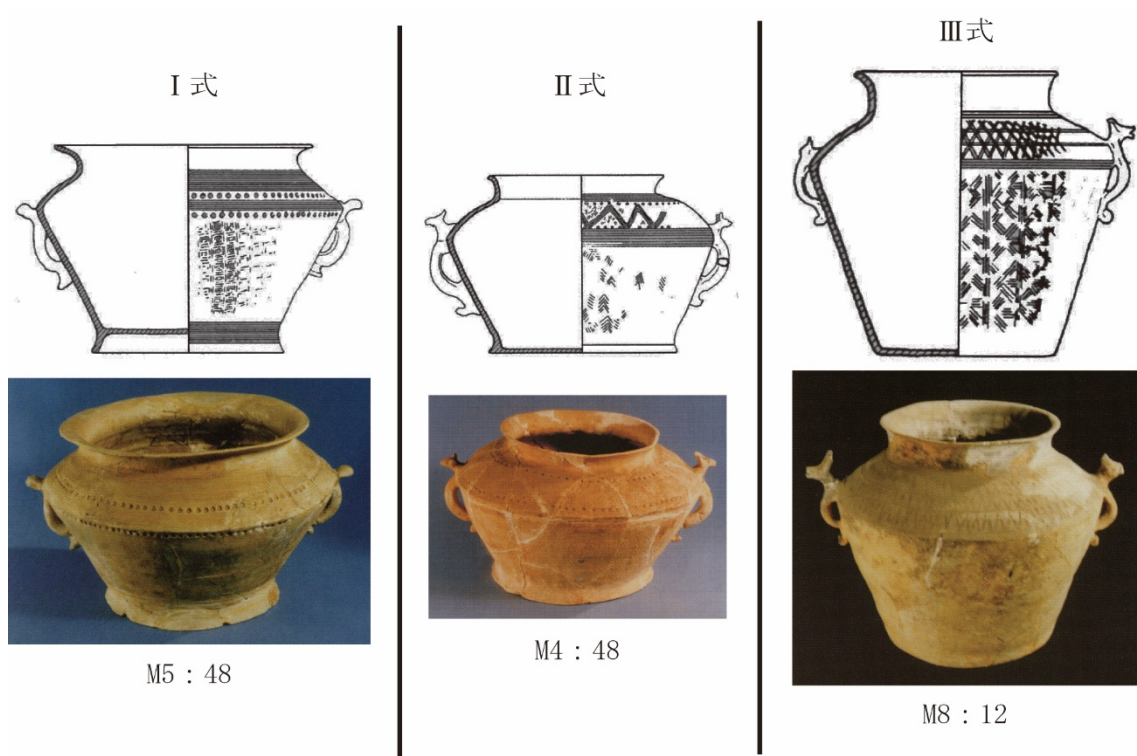


图 6：屯溪土墩墓出土原始青磁獸耳尊

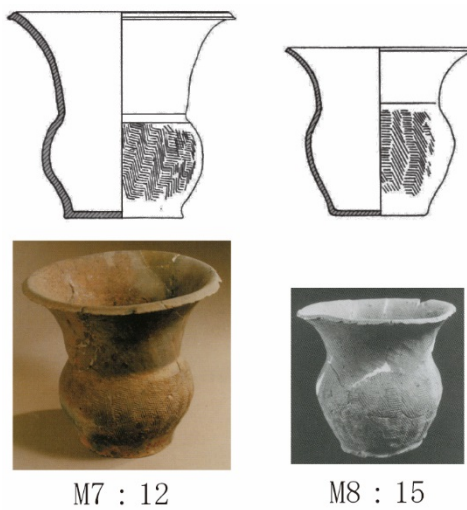


图 7：屯溪土墩墓出土印文硬陶尊

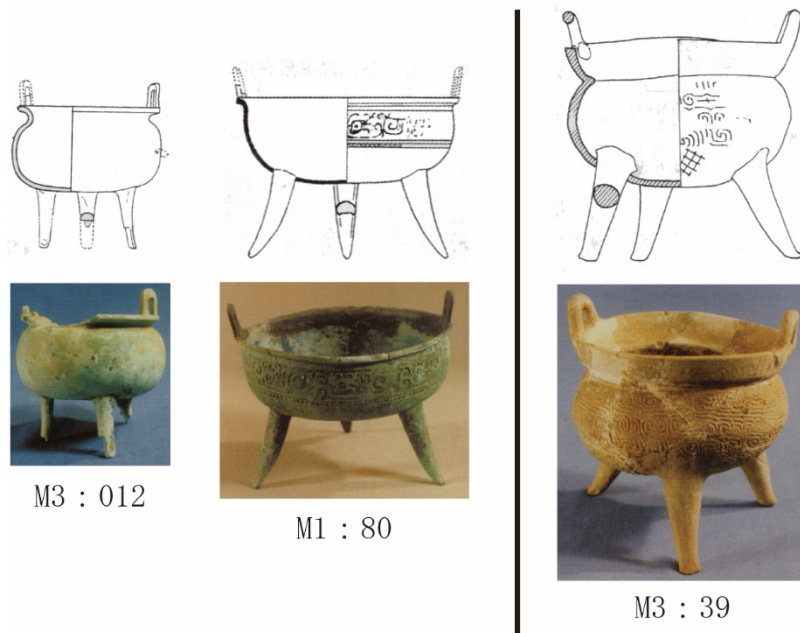


図 8：屯溪土墩墓出土青銅鼎と印文硬陶鼎

表 1：屯溪土墩墓出土副葬品組成

	青銅礼器	原始青磁	印文硬陶	土器
三号墓	鼎6、簋6、匕1、卣2、壺1、盃1、動物形尊1、鑑2、盤5、盒2	鼎1、豆14、尊13、孟27、盃3、壺5、罐9、甌12、杯1、瓶1、円座2(小孟14)、漏斗1	鼎2、罐10、瓮1	紡錘車14、器蓋2、鬲、罐、盤
一号墓	鼎4、簋2、尊2、卣2、盤2、孟1	豆29、皿10、尊5、孟6、盃5、罐10、甌3		鉢
五号墓	尊1、孟1	豆45、碗1、尊1、獸耳尊1、盃1、罐4、杯形器1	罐7	鼎2、鬲2、盃1、罐1、盤1
四号墓	尊1	豆49、碗4、尊1、罐1		叩き具1
六号墓	尊1	豆8、鉢4、碗3、孟2、盤1		
七号墓		豆7、罐1	尊1	
八号墓		皿1、鉢1、碗9、獸耳尊2、孟1、罐1	尊1	
二号墓	尊1、盤1	鉢3	罐1	孟2、紡錘車2

表 2：青銅礼器組成の比較

	食器	酒器	水器
屯溪M3	鼎6、簋6 匕1	卣2、壺1、盃1、動物形尊1	鑑2、盤5、盒2
屯溪M1	鼎4、簋2	尊2、卣2	盤2、孟1
寿県蔡侯墓	鼎19、簋8、鬲8、簠4、敦2、豆2 鋪2、匕15	尊3、壺2、盃1、鉢1、勺1	鑑4、盤4、匜1、缶6、盆3、瓢4
輝県琉璃閣甲墓	鼎19、簋6、鬲4、簠6、敦1、豆8 甗2	壺7、罍2、和1、鉢1	鑑1、盤1、匜1
浙川下寺M2	鼎19、簋2、鬲2、簠1、豆1 盞1、匕9	壺1、和1、斗1、勺3	鑑1、盤1、匜1、缶4、盆1、小盤1